

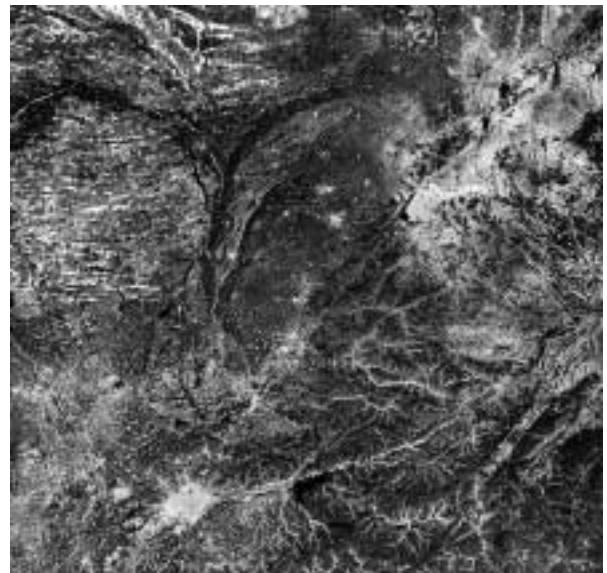
中国東北部、 旧満洲の旧神社跡地調査報告

堀内 寛晃 (COE調査研究協力者) HORIUCHI Hiroaki

荷を解いてほっとしたのも束の間、インターネットのウェブニュースを読んでいた私の目に飛び込んできたのは、「瀋陽の日本領事館前で暴動」の文字であった。ここ数年の恒例のニュースである。調査から帰国したのは前日8月14日。日本の植民地時代の中国大陸旧支配地域の中心であった瀋陽(旧奉天。以下奉天と表記。)を皮切りに、旧植民地時代の神社跡地を巡ってきたばかりであった。

調査は中島三千男先生が10年程前から取り組み、2003年度からは「神奈川大学21世紀COEプログラム」に組み入れ続けられている「旧植民地の神社跡地調査」の一環として、今年度は旧満洲地域を対象に2006年8月5日から14日まで行われた。参加者は、中島先生・津田良樹先生と歴史民俗資料科学研究科大学院生の尚峰さん(中国からの留学生)に私の4人。広大な中国東北部の中でも、特にその中央部、南満州鉄道沿線に付属地と呼ばれる主要都市が集中した奉天から長春(旧新京。以下新京と表記。)までの地域での聞き取り・遺構の実測調査に従事してきた。分担は、中島先生が全体のコーディネイトと聞き取り及び写真撮影、津田先生が聞き取り及び作図のための実測・撮影、尚さんが聞き取り及び現地移動時等の通訳、私が実測・撮影である。

旧満洲の神社を歴史学から捉えた既往研究としては、嵯峨井健氏の『満洲の神社興亡史』(芙蓉書房出版、1998年)などがあり、建築・都市計画の既往研究としては越澤明氏の『植民地満洲の都市計画』(アジア経済研究所、1978年)、『満洲国』の研究』(京都大学人文科学研究所、1993年)所収の西澤泰彦氏による「満洲国の建設事業」などがある。旧満洲地域の神社の総数については『満洲年鑑』(昭和20年版)を基本とした『神道史大辞典』付編「関東州及び満洲国の神社」(佐藤広毅編)では1944年までに302社が建てられたとされ、またその性格・規模・歴史については『満洲の神社興亡史』では国家的神社、都市型神社、開拓団神社、軍隊内神社及びその他の5つに分けられるとしている。そして大規模な国家的神社及び大規模かつ歴史のある都市型神社が満鉄沿線の都市部に集

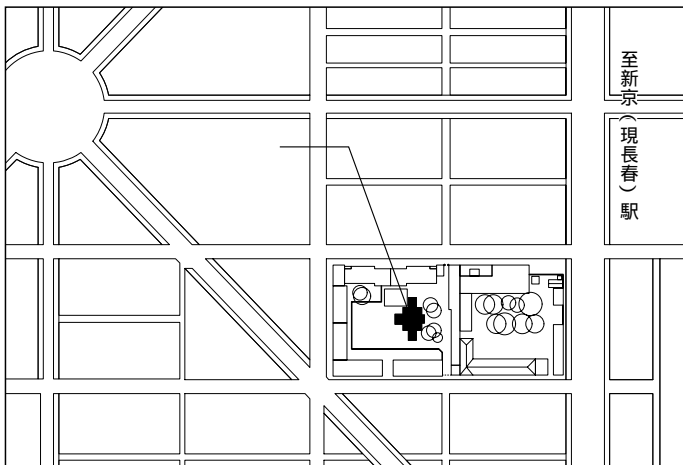


現地衛星写真 (google earth)
へびがカエルを飲み込んだ様に都市が連なる。

新京
公主嶺
四平
開源
鉄嶺
撫順
奉天

中して、今回の調査対象は全満洲に建てられた300余社の神社のうち、そのような『満洲の神社興亡史』の分類中での国家的神社及び都市型神社を主とした10社であった。

8月4日奉天到着の日からすぐ現地を下見し、翌5日から聞き取りを始めた。事前に用意した「この調査が日本の過去の植民地支配の実態を正しく把握するためのものである」という説明書きを提示しながら、道路沿いの部分が商業施設(飲食店街)その他の部分が軍関係の劇場・宿舎・公園などになっている奉天神社跡地で、道行く老人に声をかけ続けた。また実測については予め用意した『南満州鉄道経営沿革全史』所収の満鉄作成の各付属地の地図を元に跡地の現況を記録したが、元々は植民地時代の都市生活の中心であった神社も、満洲国崩壊後60余年経ち大まかな区画以外は当時の様子が見えなくなり、さらに前述のように大部分が軍関係の施設になっていて記録・立ち入りを憚られる雰囲気もあり、調査は難航を極めた。礎石敷石の類も無く大きな区画の中で社殿の位置の検討も難しい状況で、唯一旧満洲の平坦



新京神社現況配置図 約1/6000
 拝殿 鳥居 駅前から伸びる大同大街(現人民大街)



今も現地に残る社殿(左図)

な都市の地形の中から不思議とくっきり浮かび上がっていた公園の中の築山を当時の地図と対応させて本殿の跡地ではないかと予想するにとどまった。聞き取りで得られた位置とも食い違っており、位置の判断には慎重を要すると思われる。駅前から伸びる所謂バロック的都市計画の名残である放射状の道路や、駅舎、ホテル、医科大学、銀行などの施設は比較的そのままののに比べ、神社跡地の痕跡の無さは今後の調査の難しさを予想させたが、聞き取りで得られた感触では終戦後すぐに社殿が取り壊されたという様子でもなかったのが印象的であった。

7日からは移動しながら沿線の神社跡地を回る。7日は撫順神社、8日は鉄嶺神社、9日は開源神社、10日は四平へ移動し、四平神社跡地を調査。ここでも跡地は軍の施設になっていて中へは立ち入れず。翌11日は沿線から少し外れた西安神社を調査し、西安神社では万人坑の資料館の前館長、劉玉林さんにお世話になった。西安神社跡地にはおそらく社殿であろうRC造の奇妙な建物が建っていたが、調査を拒否されてしまう。当時の炭坑の炭住や幹部社宅が神社の周囲でそのまま使われ、万人坑が残るこの街では当時の記憶がまだ生々しいのだろう。12日は公主嶺神社跡地へ行き、その足で蘇家屯経由で新京へ向った。

13日は列車の時刻ぎりぎりまで新京神社と国家的神社 建国神廟、建国忠霊廟の調査を行う。この3社は確認できる遺構が何らかの形で残っており、当時の状況をかき見ることができる。建国神廟は皇帝溥儀自身が満州国の中心に設立したという意味でこれまで見てきた付属地の神社と性質が異なるもので、皇宮の前庭に基壇のみが残っており、背後には地下防空壕が今もそのままある。社殿は満州様式を加味したものだったそうだが崩壊の際に

燃やされたという話も残る。また建国忠霊廟は建国神廟が満州国における宮中賢所の性格を持つものに対し、日本における靖国神社の性質を持っていた施設で、満州事变以後の戦没者が祭られていた。広大な神域が現在は住宅団地になっており軒先まで集合住宅が迫るが、巨大な四合院の様な神門・東西殿・拝殿と、拝殿の背後の神殿は廃墟になって残っている。一時は空軍の施設となっていたそうだが、現在は何も使われていないようであった。新京神社は現在幼稚園として拝殿だけが利用されており、すぐ脇の道路から高い塀越しに破風を覗くことができた。

短い調査だったがこの調査では下記のようなことを感じた。

1. 付属地内の神社跡地に立ってみても地形的、都市空間的な配慮が感じられなかった。鉄道、公園などの近代的な都市施設と単純に併置されていた。
2. 聞き取りから拝殿や社務所は比較的長く残存し別の施設として利用されていたことがうかがえた。また少数ながら現在も再利用されている社殿があったが、多くはある時期において他の都市施設と異なり取り壊され、跡地は公的な施設に利用転換されていた。
3. 神社は人為的に造られた旧満洲の都市と同様、宗教施設としても都市空間としても根付かず、そのため戦後すぐに取り壊されることはなかったようだが、一方容易に再利用・解体・跡地の利用転換が為されていた。

結局神社跡地は魅力的な都市空間として継続せず、満州国建国の矛盾した夢のように、当時の計画で建設された都市そのものも成熟に失敗しているように思えた。植民地での人為的な都市の建設、強制的な国家の設立の結果、魅力的な場を造り得なかったという事実から我々がもう一度考え直すことは多いのではないだろうか。